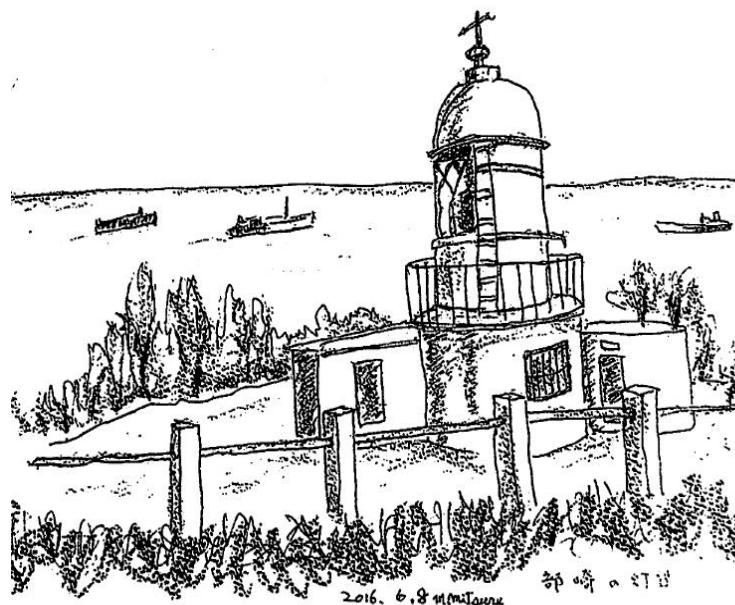


週報2020年8月2日



2020年教会標語聖句

キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。

コロサイ人への手紙 3章 15節

シオン教会信仰指標：“成熟したキリスト者を目指して”

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団

北九州シオン教会

牧師：山崎銀次郎

<http://jesus.holy.jp/>

〒800-0038 北九州市門司区大里原町 6-10

TEL 093-381-4395(FAX…4396)

牧師携帯 090-6737-5276



礼拝順序 2020年8月2日(日)

前奏	力丸勝子 師
開会の祈り	山崎銀次郎 牧師
信仰告白	使徒信条
	標語聖句唱和「コロサイ書 3章 15節」
讃美	新聖歌 171「今日まで守られ」1~3節
献身の祈り	山崎銀次郎 牧師
讃美	新聖歌 389「わが主はまことの牧者」1・3・5節
聖書朗読	詩篇 23 篇
説教題	「真の安息について」
お祈り	御言葉の応答の祈り
祝福と派遣の祈り	山崎銀次郎 牧師
後奏	力丸勝子 師

交わりの三省

- *互いに愛し合っていますか
- *互いに赦し合っていますか
- *互いに祈りあっていますか

説教要約

詩篇 23 篇

I.導入

詩篇 23 篇はダビデが神様に対する全き信頼を詩にしたもので、ダビデは羊の世話係、軍人、そしてイスラエルの王となった人物ですが、そんな彼の人生は決して平坦なものではありませんでした。幾度となく命を狙われ、逃亡生活を何度も余儀なくされました。そんな放浪、欠乏、命の危機を体験したダビデですが、それと同時にいつも神様がダビデの必要を満たし、救いの御手を差し伸べ続けました。詩篇 23 篇はダビデがそのような人生を基に歌った詩と言われています。

この詩の構成をざっくり2つに分けると、最初に羊(ダビデ)と牧者(神様)について、そして食事に招かれた客人(ダビデ)と招いた主人(神様)について書かれています。この詩について牧歌的でほのぼのとしたイメージを持たれる方も多いかもしれません。しかし実際は窮乏や危機に隣り合わせで、厳しい現実にさらされている従者(羊と客人)、そしてそんな従者に対して命を懸けて救いに導く主人を詩にしています。冒頭にある「主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。」この告白が、この詩の全てを表しています。彼が告白したかった事は「神が私の人生を養う」という事です。

イスラエルの民はエジプトの支配、荒野での放浪、捕囚民としての苦役、そして新約時代のローマ帝国の圧政を経験しました。彼らはそのような歴史の中で自分自身を見失い、魂が墮落し盡的な迷子になりました。つまり本当の主人が誰かわからなくなってしまったのです。しかしダビデの心はいつでも神様に向かっていました。彼は「私の杯は、(神様の油注ぎによって)あふれています」と告白しました。「主はいつも私を慰め、慈しみ、愛と義に満たす方だ」と歌い続けました。そんな彼の詩によって、イスラエルの民は失われた心(魂)を取り戻し、ダビデの詩はイスラエルの詩(心)となりました。そしてこの詩篇23 篇は私達の詩(心)でもあります。

II.本論(証)

先日の役員会で、私から役員の皆様に「8月9日(日)にお休みがほしい」と要望を出させて頂きました。そこで皆様が快諾して下さり、休みを頂くことになりました。当初私はこのお休みの期間、大阪に帰り家族と過ごすつもりでいました。しかし大阪を含む全国各地で新型コロナウィルスの感染者が増加する中

で「本当に今帰るべきだろか葛藤しました。」そして、そんな葛藤を続けていた、ある朝に詩篇23篇が頭の中に流れてきました。神様は「この御言葉を語るように」と私に言いました。

私は正直、日曜日に、詩篇23篇を御取り次ぎする事と、今回の帰省の事で葛藤している事と「何か関係があるのか?」と考えていました。そしてその時「真の安息は神様から来る」という思いが与えられました。その時ある気付きが与えられました。それは今回の帰省の件に関して全然、神様に相談していないという事でした。そこで私はこの期間、神様との結びつき、神様との憩いの時間を与えて下さいとお祈りしました。すると今回北九州でゆっくり過ごし、神様との結びつきを大切にしたいという思いが与えられました。

そう決断して、母に電話しました。母は最初とても残念そうでした。しかしその後このように言いました。「おまえが教会を大切にしている事がわかった」「なんだか私も神様いる気がしてきた」と言いました。そのあと一緒にお祈りしました。その時神様の大きな油注ぎが家族に流れている事がわかりました。大きな祝福と守りを体験しました。このお証しは「このような時期に帰る事が悪く」「このような時期に留まる事が正しい」という話では決してありません。『だれが人生の主で私を養う方なのか』という事を学んだお証しです。私が今回学んだことは私の牧者である神様が私を養ってくださるという事でした。

III.結論

賛美をする時、魂が引き上げられるという体験をします。その時、悲しみが喜びに、失望が希望に、不和が一致に、冷えていた心が愛に満たされます。それはその口ずさむ賛美の歌が真実だからです。神は真実なお方です。だからその告白の中に力が生まれてきます。詩篇23篇の結びは「私はいつまでも主の家に住もう」です。その告白を通じて私達は人生の中で憩いを得ます。

私達は大切にしている事ほど、主導権を自分に移しがちです。それは私達の主を見失った状態です。私達の人生は常に喪失、危機、放浪と隣り合わせです。問題はいつも突然やって来ます。しかし神はそのような状況の中にいる私達を速やかな御手を持って、いつも救い出して下さるお方です。愛と義と平和に富むお方です。

詩篇23篇はダビデの詩を通じて、神様に対する全き信頼を学ぶ箇所です。私達の信仰を妨げるあらゆる敵を追い払い、慈しみと恵みがいつも隣り合わせにある人生を送らせて下さいます。主に対する信頼を示し、共に主への礼拝を捧げてまいりましょう。

新聖歌171 「今まで守られ」 1~3節

- 1 今まで守られ 来りしわが身 露だに憂えじ 行く末などは
如何なる祈りにも 愛なる神は すべての事をば 善きにし給わん
- 2 か弱き者をも 顧み給う わが主の恵みは この身に足れり
賑おう里にも 寂しき野にも 主の手にすがりて 喜び進まん
- 3 主の日ぞいよいよ 間近に迫る 浮世の旅路も しばしの間のみ
間もなく栄えの 御国に行きて 永遠に絶えせず わが主と住まわん

新聖歌 389「わが主はまことの牧者」1・3・5 節

- 1 わが主はまことの牧者にませば われには乏しきこといかであらん
緑の牧場に静かに伏させ 憩いの汀に伴い給う
※主の手に引かれて いざくへなりとも 御旨のまにまに 日々従い行かなん
- 2 よき牧者にますイエス・キリストは わが魂をば生き返らしめ
御名のゆえをもてわれを伴い 正しき道へと導き給う ※
- 3 たとえ死の陰の谷を行くとも 災い悩みをなど恐るべき
わが主はわが身と共にいまして しもとと杖もて慰め給う ※
- 4 わが仇の前に勝ちの祝いを わがため設けし御力をほめん
主はわが頭に油を注ぎ またわが杯溢らせ給う ※
- 5 世にある限りは絶ゆることなく 恵みと憐みわれに伴わん
われは永遠に主をたたえつつ 御神の御殿に楽しく住まわん ※

詩篇23篇

「真の安息について」

【新改訳改訂第3版】

詩篇 23 篇

< 23 > ダビデの賛歌

- 23:1 【主】は私の羊飼い。私は、乏しいことがあります。
23:2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
23:3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。
23:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。
あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
23:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。
23:6 まことに、私のいのちの日の限り、いくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、【主】の家に住まいましょう。